

〈資料〉

徳田和夫氏蔵『下戸上戸合戦』解題と翻刻

伊藤 慎 吾

『下戸上戸合戦』は異類合戦物のうち、餅酒合戦物の一種である。江戸葛飾を舞台とした短編作品である。現在のところ、個人蔵の近世後期の写本一冊の伝世が確認できているだけで、他に所在を聞かない。『下戸上戸合戦』という書名は古書肆が便宜的に付けたものに過ぎず、原本に外題・内題・尾題等は見られない。内容については、元禄年間刊行の『酒餅論』やその派

生作品とは大幅に趣向を異にしており、類例を見出せずにいる。そこで広く示教を得るべく、所蔵者のご許可を賜り、翻刻紹介させていただくことにした。本物語のプロットは次のように示すことができる。

- 1 武蔵国葛飾郡で下戸と上戸の合戦が起こる。
- 2 下戸方は吊きね下の守寒餅を大将に、八百余騎

が砂村に勢揃えする。

3 上戸方は樽詰の守あわ盛を大将に、六百樽が勢揃えして深川の江戸三十三間堂に集まる。

4 餅酒の合戦が行われる。

5 上戸寺入道酒の関白大重箱の大臣が仲裁に入り、和睦に至る。

まず、異類合戦物の類型として、合戦の動機が説かれる。『酒餅論』ならば正月の宴の場で餅酒双方の論争が起こり、ついに合戦に及ぶという展開をみせる。本物語では発端の部分が唐突に両陣の勢揃えで始まり、その理由が分からない。

また、世界観として、擬人化された餅と酒の住む世界を設定しているに問わず、発端で「下戸と上戸と合戦（の）事、おびただしくぞ聞へけり」と、人間同士の対立として設定している。しかしながら、実際は擬人化された餅と酒の合戦が描かれている。『酒餅論』は、跋文によると、上戸と下戸の論争を踏まえ、それを物語世界に置き換えて作られたものである。一種の粹物語として構成されたものだが、それに対して『下

戸上戸合戦』は世界の切り替えが曖昧である。本来ならば「餅と酒と合戦の事、おびただしくぞ聞へけり」とありたいところである。

舞台は武蔵国葛飾郡のかたわらで、浅草金龍山の辰巳（東南）に当たる。作中に砂村と深川の「三軒堂」が出てくる。

砂村は現在の江東区で荒川河口西側近くの北砂・東砂・南砂あたりが該当する。この付近は田畑が広がり、江戸近郊の農地として知られていたところである。

一方、深川の「三軒堂」は「三十三間堂」の誤りだろう。富岡八幡宮（現・富岡一丁目）の東（同二丁目に該当）にあった。元禄十一年（一六九八）に当地に移築され、明治五年（一八七二）に廃寺となった寺で、京都の三十三間堂に対し、江戸三十三間堂とも呼ばれた。問題はこれを「三軒堂」と記していることである。この写本には「取替（海側）まん中」や「安房盛（池）」「法皇（風風）」などの著しい当て字も散見されることから、想像するに、「三十（卅）」を脱字し、親本に「三げん堂」とあったのを「三軒堂」と誤記したのではあるまいかと思われる。

また、酒方に「毒酒すさき弁の介」なるキャラクターが登場する（六才）。「すさき弁の介」は恐らく洲崎弁天（洲崎神社）に基づくものだろうと思われる。これは三十三間堂の東南東一キロ弱の木場（現・木場六丁目）にある神社で、当時は弁才天を祀っていた。

両軍の陣地となる三十三間堂と砂村との繋がりは判然としない。ただ、前者のそばには富岡八幡宮がある。一方、後者には富賀岡八幡宮がある。富岡八幡宮は当社の祭神を勧請したとも言われ、故に富賀岡八幡は元八幡とも称される²⁾。三十三間堂と砂村は、あるいはこの両宮を示唆するものなのかもしれない。後考を俟ちたい。

この物語に取り上げられている餅と酒を五十音順に列挙すると、次の通りである。これらはキラクターとして登場するものと、そうでないものがある。後者には（×）を付けた。表記は適宜改めている。

【餅】安部川餅（駿河）・あやめ団子（×）・栗餅・餡ころ餅・幾代餅（江戸 両国）・亥の子餅（大福餅）・今川焼（×）・今坂餅・鶯餅・鶉餅・帯解餅・柿餅

（掻き餅？）³⁾・柏雑煮・柏餅・鹿子餅・かびたり餅（川びたり餅）・鴨雑煮・寒餅（大将）・草餅・葛餅・漉し餡（×）・砂糖餅・白子餅・白玉団子・新米餅（重陽の餅）・雑煮（×）・力餅・月見の団子・田楽餅（×）・十日夜の餅・唐土餅・とう焼餅（×）・土用餅・鳥飼饅頭（鳥飼和泉の饅頭）・鍋かり餅・花餅・ばんたひ餅（万代餅？）・彼岸団子・牡丹餅（盆の餅）・路餅・豆餅・繭玉（若餅の先祖）・丸雪餅・水餅・棟上げ餅・餅米（寒餅の先祖）・焼団子・焼饅頭・米饅頭（×）・若餅（寒餅の後見）

【酒】泡盛（大将 薩摩）・磐城酒（陸奥）・夏、小夏の鬼ごろし（越後）・粕まじり（会津の諸白）・菊酒（加賀）・下戸だまし（能登 七尾）・古酒・桜川（下野 粟宮 大津屋）・佐原酒（下総）・生姜酒・白酒・新酒・末広（下野 粟宮 しま屋）・相馬の酒（陸奥）・龍の薄濁り（陸奥 仙台）・毒酒・屠蘇酒・どぶろく・とろろ酒・七ツ梅（加賀）³⁾・生麩酒・南蛮酒・初桜（越後）・丸雪酒（江戸 隅田川）・満願寺（泡盛の後見）・水いらず（陸奥 伊達の生酒）・味噌酒・味醂亭の生諸白・水戸酒（常陸）・焼玉子酒・四斗

樽（満願寺の先祖）

成立時期を特定する手がかりは今のところ得ていないが、上限・下限の参考になるかと思われることを少し掲げておく。

安永四年（一七七五）刊行の『物類称呼』巻四「団子」に今坂餅の記述が見える。「又筑紫にて、けいらんと云有、米まんぢうの丸き物にて今江戸にては、いまさか餅といふに似たり」とあって、今坂餅がこの頃からあったことが知られる。

唐土餅は文政五年（一八二二）書写の『虎屋大和太掾藤原伊織 家製蒸菓子直談付』に「唐土餅 式（丸）文目」と見える。

若餅については、村上忠順（たてまね）（明治一七年（一八八四）没）の『餠餅集説』（刈谷市立図書館蔵、写一冊）に「三ヶ日ノ間ニ搗ヲ若餅ト云由古老云リ」と記す。本書の成立時期は明治に下る。その頃には、若餅は古老の談として取り上げられるものであったことが読み取れる。

一方、成立圏としては物語の舞台となった江戸がまず想定される。中でも砂村や三十三間堂という限定的

な舞台設定や、また「かうゑん（後胤）」（一才）、「つゝ（統）へて」（二ウ）、「たへこ（太鼓）」（三才）のように、イ音をエ音とする転訛が多く見られることも地域的な特徴を示しているように思われる。

しかし、本物語で注目すべきは「下野の国のあわの宮大津や生れの桜川しまや生れの末廣」（四才）という一節だろう。桜川は福島県伊達産の酒にあり（桑折櫻川酒造）、末広は会津若松にある（末廣酒造）。四丁表の勢揃えのくだりは、あるいは錯綜しているのかもしれない。しかしそれを差し置いても、勢揃えの場面で特定の店名が明記されているのはここだけである。それも「下野の国のあわの宮」（現・小山市粟宮）という限定的な地域の酒屋を出しているのは、何かしら本物語の成立に当地が関わっているように思われる。粟宮に大津出身の商人が酒造をはじめた記録は管見に入っていない。しかし、下野には多くの近江商人が入り、当地に根付いて商店を開いている。酒造に携わったところとしては真岡の辻善兵衛が著名であるが、小山の若駒酒造や西堀源治郎、宇都宮の外池莊五郎なども知られている。粟宮の大津屋なる店もそうした由来

をもつ商店の一つではなかったかと想像される。なお、群馬県太田市の冠稲荷神社の絵馬「酒屋図」(嘉永四年)にも「桜川」が描かれている(『大絵馬集成』上)。

最後に書誌を簡略に記す。

書型 仮綴

寸法 たて二五・〇cm×よこ一四・七cm

料紙 楮紙

外題 なし

内題 なし

丁数 七丁

行数 八行

本文 漢字平仮名交り文

奥書 本文末尾に次のようにある(□は破損のため判読不可能)。

野本元右衛門□書

備考一、書名はごく新しい帙題に従う。仮題。

二、冒頭一行目に次の書入れがある。

紙数式拾五枚

紙数二五枚というのは本書と合わない。もと

もと他の本と合綴していたのかもしれない。

【注】

(1) 安政年間刊行の広重『名所江戸百景』には「砂むら元八まん」として描かれている。

(2) 誤字・当て字を多用するテクストなので、「柿餅」は「掻き餅」を指すのかもしれない。ただし、柿餅も存在する。「米・麦をいって碎き、粉となし、熟柿・渋柿を搗き混ぜてつくる。」(中村孝也)和菓子系の『淡交社』一九六七年)一六七頁。村上忠順『餅集説』にも「白柿^{ツルシ}を春て餅となす也」(五一オ)とある。

(3) セツ梅は摂津池田の名酒が有名。本物語では「加賀の菊酒セツ梅能登の七尾の下戸たまし」(四オ)とあり、文脈的に加賀の酒と読める。前田家の梅鉢紋にちなみ、加賀でも同名の酒があったのかもしれない。このほか、武蔵国深谷宿に近江商人田中藤左衛門が商店を開き、セツ梅という酒を造った(二〇〇四年廃業)。池田の同名酒の流れを汲むという(『日本の酒 銘酒 名鑑 477酒造』(廣済堂出版、一九八九年)八三頁)。情報の錯綜も考えられる。後考を俟つ。

- (4) 『菓子文庫』四号(むかご会、一九七〇年)所収。
- (5) 大豆生田稔編『近江商人の酒造経営と北関東の地域社会 真岡市辻善兵衛家文書からみた近世・近代』(岩田書院、二〇一六年)参照。

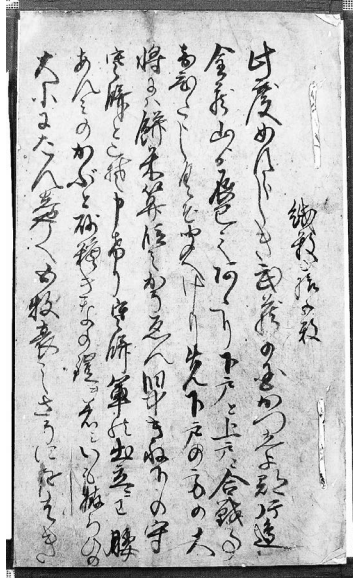


図1 巻首

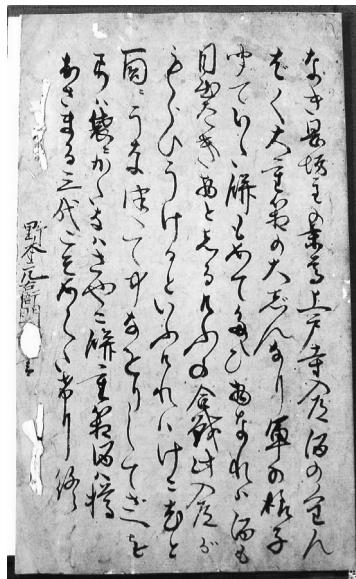


図2 巻末

【翻刻】

紙数貳拾五枚

此度めすらしき武蔵の国かつしか郡片邊
 金龍山今辰巳のあたり下戸と上戸と合戦事
 おひた、しくぞ聞へけり先下戸の方の大
 将には餅米算段のかうゑん吊きね下の守
 寒餅とこそ申けり寒餅軍の出立ニわ腰

あんみのかぶと砂糖きなこの鎧ヲ着シいも拵らひの
 大小にたんしやく五枚表のさうにをはき

白砂糖のざへを持しとやかに出たもふは扱も
 家の後見ニは枝（前カ）なり前玉（前カ）の末孫若餅とこそ

申けり其外つゝ餅共ニはひかん團子の丸助
 塩あつきの陣羽おり米まんちうの笠をかむり
 焼團子竹鎧を持って堅めけりひらかた

草餅の青助はこわ飯の陣羽をりにとう焼
 餅の笠をかむりてんかく餅の長刀をまつ
 かうにさひて堅めけり柏餅皮冠の五郎は
 青場の羽なりニ今川焼の笠を冠あやめ團子
 の壺本鎧を持って堅けり土用餅力餅寒さら
 しの白玉餅其同役の水餅取替まん中

「一才

「一才

焼まんちう盆のほた餅鹿子餅五文取の

拾五巨^{マウ}矢尻を揃て堅けり月見の團子

白丸に菊の節句の新米餅十日夜の餅^ニ

猪子の大福餅^ニあたかひ十一月生れの帯

解餅鍋かり餅かひたり餅壺文團子の

玉をこめ筒先揃て堅けり其外つゞく

餅共^ニはするがの住人安部川餅両国の生れの

幾代餅春のけしきの鶯餅砂糖餅うづ

ら餅大佛餅^ニ今坂餅くす餅花餅あん

ころもちつぶての役人むねあけ餅夫^ニつゞへて

丸雪餅豆餅柿餅白子餅柏さうにかも

さうにふき餅あわ餅ばんたひ餅唐土餅を

先として都合其勢八百余騎砂村^ニて押寄て

白粉のまくをふり七ッ鉢の陣たへこ重箱の

ばん木をならし餅共不残あつまりて大将

寒餅申様此間酒共が逆心を全立我く共

をせめんと間近よすると風聞する誠にたう

ろうが丁ちんを持ってたへ松を持って向が如し

けれどもよだんあるへからずと一々次第^ニ

ふれ渡^ス

「二オ

「二ウ

扱も上戸方の大将^二はさつまの国の名物樽詰の
守あわ盛とこそ申けり安房盛軍共の

出立^二はけすり坂の衣着^二たが斎の帯をしめ

むしろこもの陣羽おりをかふと鉢を冠り

徳利こしらひの大小^二銚子なりの下駄を

はき七合入のざへを持しとやかに出たもふは

扱も家のこうけん^二は呑口四斗樽の末尊

まんくわん寺とこそ申けり其外

つゝへて隅田川上て名高丸雪酒加賀の菊酒

七ツ梅能登の七尾の下戸たまし越後新

酒初桜外夏小夏の鬼ころし會津の

諸白粕まじり伊達の木酒の水いらず

仙臺龍のうすにこり相馬の酒にいわき

酒常陸の水戸酒御名酒下おさの国さわ

ら酒下野の国のあわの宮大津や生れの

桜川しまや生れの末廣に味噌亭の

木諸白子供たましの白酒に味噌酒

とも酒生麴酒うまくたましてとろゝ酒

風をはらへの生が酒から身でせめるなん

「三才

「三ウ

「四才

ばん酒目つふしの焼玉子酒古酒新酒

の割元様并片白の友を連とぶ六殿を

先として都合其勢六百樽千鳥鎧鉦てん

もく鎧長柄の丁子の長刀に五合張の

拾五^(マ)巨三合の大刀大はらこつふの小わきさし

道具揃て深川の三軒堂^ニ押寄て酒袋の

まくを堅杉葉のふり追立て赤鍋の陣

かねにたへこ樽を打ならし酒共不残集て

大将安房盛申様此間餅共が砂村^ニ引

竜^(マ)りおもひもよらず我々に軍^サしかける

心あり誠にゑんじやくなんぞ法皇^(マ)の

心さしをしらんとは此事也けれとも小てき

と見てあなとらす大てきと見ておと

ろかずさきからしかける軍なれば

慈悲^ニ及すひと合戦をいたさへては何と

しやうとかくもの共呑口に気を付て軍の

用違致すへしものおとなしくふれ

渡^ス最早砂村^ニてあり吹立るあまたの餅

聞海にひゞきし陣たへこむかしの八嶋の

たん浦の合戦^ニも余りおとらのさわきなり

「四ウ

「五オ

夫とる聞より酒共は右往左往とせめ来りと

出むかわんと忝ニばん我もすみ出八百余騎の

餅共と六百樽の酒共と一同ニとふと押寄と

毒酒すさきの弁の介是へまかり出たるは

下戸方の大将餅米さんたんのかうゑん

吊きね下の守寒餅なる酒軍勢こも

かふりの樽様共陣をかうさんせよと

云けりはあわ盛むと立あかり是へ罷出

たるはさつまの国住人樽詰の守安房盛

なり此安房盛をこもかふりとはもつたへ

なひ我こそは土農工商の道をははなれ

日本中の神々様上々様のもて遊こもの

守とは我事なり寒餅かぶとをのへて

下ニなれいやすへさんなあわ盛め道具て

せめておちなんと鎗や長刀弓鉄砲よんで

めてから打かくれて心くたりと酒共も

まけすおとらす飛道具こわかなわじ

と力のきたがへに仕様けんじゆつは上段下段

とよんでめて神の前ニわ拂切佛の前ニは

来拝切山の上ニは坂落し海のそばでは

「五ウ

「六オ

「六ウ

波立切詰てなける玉つき切はつし〜
丁々とたかへニひじゆつをつくせども
さらに勝負と見へされは軍かさへ中
向合八尺余丈の大坊主白しやうぞくニて
押餅の軍配を持片手に徳利たづさへて
しばらく〜とこひをかけてすゞみ出
是へまかり出たるは武蔵国ニの隠れ
なき岡坊主の末尊上戸寺入道酒のくわん
ばく大重箱の大じんなり軍の様子
聞いていた餅もめてたひ物なれば酒も
目出たき物としるけふの合戦此入道が
もらひうけるといふければけにもと
一同ニうなつへて中なをりしてざへを
弓は袋ニかたなはさやに餅重箱酒は樽
おさまる三代こそめてたけり終

野本元右衛門□□書

「七ウ

「七オ

【後記】 貴重な資料の翻刻・紹介のご許可を下さった徳田和夫先生にお礼申し上げます。